
Addict

松本かなた

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Addict

【Nコード】

N0631K

【作者名】

松本かなた

【あらすじ】

入院中の琴音はある人物と夜の公園で出逢う。2人は驚きの場所で再会を果たし、彼女はある事実を知った。

（前書き）

それほど残酷ではありませんが、自殺など苦手な方はお気を付けください

夜も深くなる頃合い。月明かりが異様なまでにまぶしくて少し俯き加減に夜道をあゐりていた。

細く狭い、街灯の無い道を私は進んでいく。何故？そんなの決まってる。

普段まだ太陽が地を照らしている間は病院で入院生活を送っている。普段と言ったのには理由があつて、こつやつてたまに外に出たりするからだ。もちろん、帰ったところにはこつぴどくしかられる。でも、今から帰つても仕方ない。

病院を抜け出すための道は確保出来ても何もなかったかのように帰ることは未だ出来ずにいる。それは、私の入院しているところが普通ではないところだから。

私は外の空気が好きだ。今くらいの時期になると少しひんやりして気持ちがいい。ただ、空気が好きなだけで他には何も求めることはない。

病室にいても見えるのは天井と自ら引いたカーテンだけ。窓はない。変化もなく、周りからの接触も何もない。この時間を除いて。昼間から人通りの少ない道を進み、一人がやっと通れるくらいの細い道を抜けると、公園の跡地についた。

座れそうな所に腰掛け、ぼーっと空を見上げる。満月の夜というのはなかなか風情があつて良いと思った。

ざわざわと近くの長い草が揺れた。そこに顔を潜めていたのは一匹の猫。

「おはよう、ミケ」

周りの景色と不釣り合いな言葉をかけた。いつもここに来ると近くに寄ってくる猫で、毛並みがそれなりに整っているのは誰かが世話をしているからなのだろう。

私がミケと呼んでいるその猫は隣で丸くなっている。もう一度空を見上げると公園の前を誰かが通った気がした。影がなんとなくちらついただけなのだが、こんな時間に出歩くのは私くらいだろうと思っていた。

…！？

ミケを挟んで隣にいつのまにか二十代くらいの男性がいる。さっき通った人だろうか。私はその男性をまじまじと見つめた。

言える立場じゃないけど、こういうのを不審者と呼ぶんだと思う。タバコをふかし、優しい顔つきで空を見上げる。物静かそうな雰囲気からこんな時間にこんな場所にいる人種ではないと感じた。

「どうかしましたか。」

何気なくかけられた一言に返答しないでいたからか、視線がこっちに移される。

「え？」

「いや、なんだかたどたどしかったので。」

穏やかな声色で言う。流れる時間がとてもゆっくりで心地いい。

…人は嫌いなはずなのに。

「すいませんね、急に現れて。不審者ですけど、不審者じゃないですよ？」

なぜか語尾にクエスチョンマークが付いている。明らかに矛盾していたその言葉を私は何故かすんなりと受け入れてしまった。

「私も…そうです。」

会話を続ける意思はない。それは多分相手も同じだと思う。どんな目的でここに来たのか聞いてみたかったけどやめておこう。そんな勇気、持ち合わせていない。

ふと横を見ると、そこには一匹の猫しかいなかった。

——っ。

一瞬驚いたが、今日のことは何もなかったことにしよう。そう思った。

例えば、もしも、この世からいなくなったら。

そんなありきたりな問いかけを私は何度も自問した。それは誰が見ても無意味なことだとしても、それを止めることはなかった。…できなかった。

こういう話はみんな嫌がるかもしれないけど、死にたい衝動というのは、いつ、どんな場所でも常に付きまとう。そうやってしまつては逃げるだ何だと他人に言われても、そんな薄い言葉は欠片も届かない。そして追い込まれた人間は何だってする。

—— 高所から下をのぞけば きつと 誰でも 吸い込まれそうになる。

傷だらけの体は痛みが増し、私の中に残留していて失くなることのない過去の痛みが各部位で疼き出す。その時、私は宙を舞った。

日が昇り、私が病院へ戻るといつものごとく担当の人が待ち構えていた。でも、今日はあまり怒られることはなく、自分のベットへと向かうことができる。

朝食はあまり食べたくないで本でも読んでいようと思い、六人部屋の病室へ着くと、今まで開いていた場所に誰かがいる。見慣れない顔だ。紺色のジャージを着て、窓すらもない白い壁を眺めている。その間には私のベット…何だか行きにくい。

少し足早に目的の場所へ行くと、ザザッとカーテンを閉め、自分を隔離した。

昨晩に出会ったあの男性が消えた後、入院するきつかけとなった出来事を思い出していた。そうする度に体がうずく。生きているということが重い。泣きたくなる。…朝からなに落ち込んでいるんだろう。バカバカしい。

「あの…昨日の夜、公園にいませんでした？」

誰に充てられたのか、誰が発した声かも分かるはずの無いそれは、

私と不審者ではないと自らの口で言っていた男性しか知らないはずの出来事だった。

私はカーテンの端から少しだけ顔をのぞかせる。

「おはようございます。」

昨夜に聞いたのと同じ声が耳に届く。顔は暗くてよく見えなかったから本当に同じかどうかは分からないけれど…。

「奇遇…ですね。」

場所が場所なだけあってこう言うしかなかった。こういう所とは無縁だと思ってたから。

人は見かけによらないというけれど、この場合は類が友を呼んだ形になってしまつので見た目でわかることのほうが多い。今回は違つたけれど。

「朝食、とらないんですか？」

「はい…。」

一言短く返すと、私はカーテンの内側へと潜る。周りを拒絶した空間はとても居心地が良く、二番目に落ち着く場所のはずだった。けれどそうはいわずに私は人見知りを発動し、怯えた。昨日とは違う。

「河口さん。」

看護師のだれかが名を呼ぶ。私のものではない。そしてここにいるのは私と隣の男だけ。

横で少し物音がする。どうやらここから出て行つたようだ。

六人部屋にたった一人が残る。気が安らぐ…と言つては変だが、

一人の気楽さが代えがたいものだ。今の私は思う。

入院生活は短期的なものが殆どだが、長期的だとこれ程辛いものはない。一週間程、又は一カ月くらいのガマンでもそれはそれで耐えがたいものがあるのに、それが何カ月にもなつたらたまつたものじゃない。

少しでも身を傷付ける心配があるものは傍に置かないし、見つけたら回収される。もちろん薬もその場で飲まされるからストックな

んてあるはずかない。…入院前のものや、ちよつとした理由で手に入ったもの以外は。

まず、一患者が抜け出せるような警備には問題があるけれど、人手不足が深刻なため、一日中みんなが働きっぱなしになっている。人目を盗むのが大得意な私にとっては嬉しい限りだが、そろそろ鍵付きの個室に移されてしまう。

別に嫌じゃないし、困ることもない。寧ろそうしてもらえると助かる。

家には帰りたくないし、他人と会ったりするのも嫌だ。独りの空間が欲しい。それがどれほど辛いものか知ってるし、それによって人がどのように変わっていつてしまうのかも身に染みてる。でも、そうしたいと願うのは私が我儘だからに他ならない。

院内には自殺志願者が多い。もう気付いているだろうが、ここは閉鎖病棟と呼ばれている場所で、患者の大半は薬の過剰服用や自殺未遂を繰り返す人だったりする。一旦この中に入ってしまったら厳しい監視がつくため、やりにくくなる。が、できないわけではない。ある一心で思い込んでしまえば人はなかなか諦めの悪い種族だ。

こんなに野蛮である種パワフルな所に野放しにされたらたまったもんじゃない。

残念ながらこの六人部屋にいる患者は隔離部屋一步手前の要注意人物のレッテルが貼られている人たちが集まる力オスな領域である。いくらベットが空いていたって、最初からここに来る人というのは数えるほどしかない。

まあいいや。他人と関わってもろくなことはない。

「琴音ちゃん」

カーテンの外から声が聞こえた。今回は私の名だった。

布団から上半身を起こすと、少しカーテンを開ける。

「朝ごはん、食べてないでしょ？お薬飲めないからパンだけもってきたよ。」

看護師の人の手にあつたのは二錠の薬と水、小さなパンの乗った

お盆だった。それをベットの何か置くことのできるスペースに置き、座った。仕方なく食べ始める。

この看護師さんは一番仲がいい。病院であつたこととかをひたすら喋るけど、特に私自身のことには直接干渉してこないから。まあ、私が話したい時は話すこともあるけど。

基本的にご飯は食べなくても生きていけるので、もらったお碗を食べれば十分おなかがいっぱいになる。不健康だが、この中じゃまだ健康な方だ。

薬を飲むと、看護師さんはおぼんをとり、どこかへ戻ってゆく。また一人きりになった。

カーテンを戻し、横になる。夜までもうやることはない。無気力な自分が恨めしい。もちろん今みたいに誰かが話しかけてきた時以外は他人との交流はない。

私はただ長く感じるだけの時間を、考えては涙し、考えては傷つけを繰り返して過ごすことしかできなかった。

夜の消灯時間直前。

こんなところにそうやすやすと眠りにつく人はいない。普通の病院よりも夜勤の看護師さんは多いけれど、それはそのためだ。だからといって沢山いるというわけではないので一人一部屋程度だ。ちなみに部屋数はそんなにない。

このくらいの時間には乱心する人が多い。

そんな中でヒマそうな人を見つけ、私は屋上へ行きたいという胸を伝えた。もちろん快く了承してくれた。

地下にあるだけあつて屋上へ行くには結構大変だ。何よりそこへ行くには必ず誰かの付き添いがないといけないし、変な行動を取る恐れがある人は連れていってもらえない。何故かは想像にお任せする。

「あ。」

もう少しで屋上までつきそうなくらいのとき、思い出したかのように看護師さんが口にした。

話を聞く限りでは船客がいるそうで、それはどうやら今日隣にやってきた”河口さん”とかいうひとらしい。

——— キー

高いようで低く、少し重たいような音が階段に響く。この音ももう聞き慣れてしまった。開けた瞬間吹く少し強めの風もとても清々しい。室内との温度差で少し寒く感じるが、慣れてしまえば丁度良くなるだろう。

外に出ると田舎町の空が広がる。満天とは言えないけれど、沢山の星達が煌びやかに瞬いている絵図らはいっつも見ても美しい。

にこやかに煌めく星々に見守られ、私はいつも座っている席へ向かう。付き人はドアのすぐ横でこちらを見ていた。

屋上に来てやることといえばボーツとするくらいで、ただ外の風に当たって、低い屋根達を見下ろすくらいだ。他にやることもないし、何かをするためにここに来たわけじゃないからこれで満足する。その時々思うことは多いけれど、この時間は大切にしたい。まあ、一人になりたいだけなんだが。

ささやかに風が吹き、私の髪をなぜる。都会よりもはるかに暗い地面と混沌の闇に浮かぶ小さな宝石に見とれていると、小走りしたようなパタパタとした足音が聞こえてきた。

一瞬疑問に思ったがその足音が誰のものなのかすぐに分かった。その人は私の横にやってきて顔をのぞかせる。その行為に驚いて、少しびくついた。そしてあることに気付く。

二度ほど見たこの人の顔はもちろん一緒だ。でもその二度とも今とはなんとなく雰囲気が違う…気がする。

その河口さんと呼んでいいのか分からない人はニンマリと微笑み、私の隣に座った。

足を少しぶらつかせている。空を見上げて、何とも嬉しそうに見えた。

「昨日の子だよね。えつと…琴音ちゃんだったけ？」

急に始めたと思ったら今度は急に足を止め、こちらを向く。印象がまるきり変わった。

「俺は河口吾斗…一応ね。でも君が今まで見た人とは違う。」

どこかで聞いたことのあるセリフだった。本とかそういうのじゃなく。

「乖離性人格障害…ですか？」

私が小さい声で呟くと、さっきのようにニンマリと笑って空を見上げた。

「そう。俺はサブな人格でさ、出る度いつもこいつを困らせたりしてるんだ。でも病院にいる間は外に出られないから今はここにいろんだ。…まあ“俺は”の話なんだけどな。」

私にとっては取りとめのない話だった。病院にいると出られない人格とか、“俺は”とか…。いや、人ごとじゃないのだけれど。

「今はまあ…こいつの代わりに出てきてやってる。」

「代わり？」

「ああ。話してみたかったらしいよ、君と。でもこの時間だと荒っぽいのが出てきちゃうかもしれないから俺が先に出てきてるんだ。そいつは夜限定で出てくるからな。」

“荒っぽいの”と言われてる人格がどのくらいのものかは分からないが、河口さん主人格の気持ちはしっかりと分かる。

後ろの看護師の一人が戻って行った。おそらく河口さんのだろう。

「でさ…」

前を向きなおし、小声で言う。私も前を向いて会話に努めた。

「ここの柵に穴とかかって開いてない？」

ここの病院は…というより基本的には病院の屋上には大きな柵がある。たぶんそのことをきいているのだろうが、この堅い針金で編まれたものに穴をあけるとなかなかな難しい。監視もつくし。

——でも私は知っていた。

「入り口のうしろ。洗濯物とか干すところがあるんだけど、その

奥にある。下はもちろん道路。裏のね。：私には出来なかったけど。

彼は驚いた顔で私を見る。そんなもの無いと思って聞いたのだろう。第一、洗濯物を干すところに入るのにも鍵は必要だし、ここにくるにも別の鍵がある。更に監視付きというのもあって、そんなこと知れる機会なんてゼロに等しい。

「そつか…ありがと。侵入方法は後で模索してみよ。」

「私のベットの引き出しにマスターキーの複製があるよ。」

苦笑し、今度は普通の声の大きさで「君、面白いねー。」といった。私にはその言葉の意味が分かる日は一生くることがなかった。

「じゃ、俺はそろそろ。」

人格を戻すという意味だったのだろう。そう言って彼は意識を失った。

自殺を推薦する気はないが、止めるつもりもない。だって自分がどうしたいのなんて自分で決めればいいと思うから。

その後彼は案の定この世を去った。三人で一人という複雑な事情を抱えて…

二つあった私のマスターキーは一つになり、一日だけうまったベツトもまた空になる。

ニユースにもならないような小さな小さなこの事件は私が死ぬまですつと忘れることのできない出来事になった。

それはたった一つ、彼が鍵の代わりに置いて行ったものが私にとって大切なものになってしまったから。

それが何かはここでは言えないけれど、唯一出会えた、私と同じ人だったことは書き記しておく。

（後書き）

お粗末さまでした。これは2009年の夏ごろに書いた作品で、これに繋がるような作品も今後書いていこうかなあと思っています。またご縁があつたら是非よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0631k/>

Addict

2011年1月25日02時21分発行